

一八八四年六月十五日(日)

スレンドラ氏の別荘における大祭

信者と共によるこぶタクール

今日タクールは、スレンドラの別荘においでになった。日曜日、ジョイスト月黒分六日目。キリスト暦一八八四年六月十五日。タクールは、朝九時ころから信者たちを相手に、楽しく過ごしていらっしやる。

スレンドラの庭園はカルカッタ近郊のカンクルガチーという名の村にある。近くにラームの別荘もある。タクールは約六ヶ月前にそこへおいでになったことがある。今日は、スレンドラの別荘で盛大なお祭りが催されるのである。

朝からサンキールタンが始まっていた。キールタンの歌手たちは、マトゥール(＝曲名——クリシュナがマトゥラーへ去った後のラーダーや牛飼乙女たちの気持ちを表現した歌)をうたっている。ゴビーたちの愛、聖クリシュナと別れた聖女(ラーダー)の悲嘆のありさまなど、皆、物語るのである。タクールは時々、前三昧状態になっていらっしやる。信者たちは庭園内の建物のなかで、あちこちに並んで立っている。

建物の中央の部屋でサンキールタンは行われていた。部屋の床には白い布が敷かれて、ところどころに長枕（ひじ掛けやクッション代わりになる長い枕）が置いてある。この部屋の東西に一つずつ部屋があり、北と南にはベランダがある。建物の前面、つまり南方かたにはレンガ敷きのガートがある美しい池がある。建物とそのガートの間には、東から西へと庭路が通っていて、両側には花の咲いている灌木やクロトンなどの木が植えてある。建物の東側から北向きの玄関まで、赤レンガの粉を敷きつめた道がもう一本本ついている。この道の両側にもさまざまの花木やクロトンが植えてある。この道の東側にもう一つ、やはりレンガ敷きのガートを具えた池がある。村の人々がここで水浴したり、飲み水を汲んだりしている。建物の西側にも道があつて、その西南は台所になっている。今日、この台所はたいへんなざわざだ。スレシユとラームが、タクールや信者たちの接待でつきつきりで指図している。

建物のベランダにも信者たちが集まつていた。また、友達と連れだつたり、或いは一人で池のほとりを歩いてゐる人々もある。ガートの上で休んでいる人たちもある。

サンキールタンが始まつた。部屋のなかに信者たちは集まつた。バヴァナート、ニランジャン、ラカール、スレンドラ、ラーム、校長、マヒマーチャラン、そしてマニ・マリツク、その他大ぜいが来ている。相当数のブラフマ協会員たちが来ている。

マトウールの歌が始まつた。キールタンの歌手たちは初めにガウル・チャンドリカ（クリシユナとラーダーの歌をはじめる前に歌う曲で、序曲ともいう）を唱つた。ガウランガ（チャイタニヤ）が出家をした。彼はクリシユナに対する愛で狂気の有様である。彼に去られたナバドウィープ（チャイタニヤの生誕地）の信

者たちは悲嘆にくれて泣いていた。それをキールタンの歌手たちはこんなふう唱った。

——ガウルよ、一度ナディアに来ておくれ——

ナディア^{ナバド}ウイーブ

そのあとで、^{シュリー・マティ}聖女(ラーダー)の悲しみを唱った。

タクールは前三昧状態になられた。突然立ち上がって、世にも悲しげな声で即興の句をお入れになる——「お友達！ 命をかけた恋人をわたしのもとに連れてきて！ さもなきやわたしを、あそこへどうぞ連れてって！」タクールはすっかりラーダーの気分になつてしまわれた。言葉を語っているうちに声が出なくなり、身体の動きはピタリと止まつて半眼を閉じ、全く外界の意識をなくして三昧に入られた！

かなり経つてから、平常にお戻りになつた。そして、再びさっきの悲しげな声音で語られる。「お友達！ あの方のところへ私も連れて行つて下さいな。そして私は、あなたの召使いになるつもりよ！ あなたがクリシュナへの愛を教えてくださいな！ わたしの命の恋人を！」

キールタン歌手の歌はつづいた。^{シュリー・マティ}聖女(ラーダー)は言う——「お友達！ ヤムナー河への水汲みに、私はもう、もう、行きません。はじめ、カダムバの木の下で愛しい人に会つたので、あそこに行くこととまらない！」(訳註、カダムバ——^{カダムバ}迦曇婆、この名前を聞けばインドのヒンドゥー教徒ならクリシュナを思い浮かべるほどクリシュナにゆかりの深いアカネ科の木)

タクールは再び前三昧状態になられた。長い溜め息をついて悲しそうにおっしゃる——「アハー、アハー！」

キールタンはつづく。——シユリー・マティ聖女（ラーダー）の言葉である。

クリシユナに会いたいこの欲が

熱に燃える身を冷して生き返らせる

歌手たちは時々、即興の句を入れる。

（私に一度会わせておくれ）

（飾りのなかの飾り（クリシユナ）がないので もう飾りには用がない）

（私の幸せな日は去って 悲しい日々がやってきた）

（悲しい日々はなぜ長い）

タクールが即興句をお入れになる——

（その時は、今日まだ来ないのか）

キールタン歌手の即興句——

（こんなに時が過ぎたのに、今日まだその時こないのか）

1884年6月15日(日)

歌
—

死ぬよ 死ぬよ 友よ 私はきつと死ぬ

私のすばらしいカヌを誰にわたして行こう

ラーダーの体は焼いてくれるな 河に流すな

体が焼けないように気をつけておくれ

クリシユナと楽しんで体を流さないでおくれ

クリシユナと楽しんで体を河に捨てないで

火のなかに投げて焼かないでおくれ

死んだらタマラの枝につるして

タマラの枝に縛りつけておくれ

そうすりゃタマラに体が触るから

黒いものに触ることができるから

クリシユナは黒 タマラの木も黒いから

黒いもの 私は大好き 子供のころから好き

私の体はカヌのもの —

カヌからどうぞ離さないでおくれ

カヌ — クリシユナの愛称

シユリ・マティ
聖女（ラーダー）の最後の場面になった。——ラーダーは氣絶して倒れた。

歌——

ラーダーは氣を失いて倒れぬ

（愛しき人の名を言いながら）

（ラーダーの市場はしまったのか）

親しき友は目を閉じやりぬ

（ラーダーは何故にこうなったのか）

（今の今まで話していたのに）

白檀の粉を体に塗る人もあり

悲しみに身ふるわせ泣く人もあり

（よき人の命去りぬと）

顔に水を注ぎかける人あり

（もしや生き返るか）

（クリシユナ恋いて死んだ人が、水で生き返るだろうか）

ラーダーが氣を失ったのを見て、女友達はクリシユナの名を呼んだ。シャーマ（クリシユナ）の名が

聞こえると、彼女の意識は戻った。タマラの木を見て、眼の前にクリシュナが来たのかと思つたのだ。

歌――

シャーマの名に息吹き返し

ラーダーはあちこち眺めしが

満月のごとく美しき

あの顔は見えず ヨヨと泣き伏す

(シユリー・ダーマは何処に、と言いて)

(お前たちが名前をとなえたその人は何処にいる?)

(一度でいいから連れてきて)

シユリー・ダーマ――花の首飾りをした人の
意、クリシュナのこと

目の前にタマラの木ありて

そのタマラをつくづくと眺め

(あ、あの頭飾^{チユール}りが、私のクリシュナのあの頭飾^{チユール}りが、と言って)

(チユールが見える――)

(タマラの木に孔雀がとまっているのを)

(あのチユールが見える、と言う)

女友達は皆で相談して、マトウラーに使いをやった。使いの女はマトウラーに住む一人の女と知り合った。

歌――

年ごろも同じ一人の女

使いの身許みもとをたずねたり

聖シユリー・マテイ女マテイ（ラーダー）の女友達の一人である使者は言う。――「私は、あの方を呼ぶ必要はないと思う。

あの方がご自分で出ていらつしやるでしょう」そして女使者はマトウラーの女といつしよに、クリシユナのいらつしやるどころへ行つた。そうして、夢中になつて声をあげて泣きながら訴えた――

「何処へいらつしやるの、ハリは。ああ、牛飼ゴ乙女ビたちの命である御方！ 命をかけた恋人は！ ラーダーの恋人は！ 恥ずかしさを取り除けて下さるハリは！ どうぞ会っておくれ！ 私は大そう威張つてこの人に言つたのです。あんなが自分から出てきてくれるだろう。つて――」

歌――

マトウラーの都のかしい女は

さげすみ笑って答えたり

みすばらしげな牛飼乙女が

(アー 何という)

(どうしてこの先に行けようか)

(こんなに貧しいなりをして)

七つの扉のその奥に

お住いなされる王様の

そこへどうして行かれよう

(どうして行くことができようか)

(お前の凶々しさを見て 私は恥ずかしくて死にそうだ)

ああ ああ 気高く聡明な

ゴープイーたちの命の御方

(気高いお方よ、現れて女召使いの命を助けておくれ)

(ゴープイーたちの命かけた恋人は、どこにいるの！)

(ねえ、マトゥラーの王様、会って下さって、女召使いの心と命を助けておくれ)

(ハリよ、ああ、ああ、ラーダーの恋人よ！)

(ああ、何処にいる、胸をささげた恋人、恥じらいをとりのぞくハリよ)

(会って、女召使いの誇りを支えておくれ)

ああ ああ 気高く聡明な

ゴープーたちの命の御方、と

使いの女は声高く叫びぬ

ゴープーがすべてを捧げた、命の恋人は何処にいる！ この言葉を聞いて、タクールは三昧に入られた。キールタンの終わりに、歌手たちはサンキールタン（ひとしお熱烈に神の名を讚美した賛神歌をした。尊い御方は再び立ち上がって！ 入三昧境だ！ やや意識が戻ると不明瞭な音声で、「キトナ、キトナ（クリシユナ、クリシユナ）」とおっしゃる。恍惚状態のため、クリシユナの名を正しく発音できないのだ。ラーダーとクリシユナは再会した。キールタンの歌手たちはその模様を歌った。

タクールは即興の句をお加えになる――

ラーダーは立っているよ

体をもたれかけて

ラーダーは立ってるよ

シャーマの左に

ラーダーは立っているよ

タマラの木の下に

ラーダーは立ってるよ

今度は称名^{ナム}サンキールタンである。彼らは長太鼓^{コトル}とカルタル(小さいシンバル)に合わせて歌いはじめた。「ラーダー・ゴーヴィンダ・ジャイ! (ラーダーとトリシュナに勝利あれ) 信者たちはもう夢中である! タクルルは踊っていらっしやる。信者たちもタククルルの周囲をめぐって楽しそうに踊っている! 口々に、ラーダー・ゴーヴィンダ・ジャイ、ラーダー・ゴーヴィンダ・ジャイ」と唱えながら踊っている。

無邪気と神の体得——神への奉仕と世間への奉仕

キールタンが終わると、タククルルは信者と共に少し坐っておられた。そのときニランジャンがやってきて、地に額^{かぶ}ずいてごあいさつ申し上げた。タククルルは、彼を見ると立ち止まられた。喜びのために目を大きく開き、ニコニコしてこうおっしゃる——「お前、来たのかい! (校長に向かつて) ほら、この若者は大そう無邪気だよ。無邪気さというものは、前生でたくさん修行しなければ得られないんだ。ずるい性質や勘定高い性質があると、神様のところへ行かれない。

よく気を付けて見てごらん。神が化身して現れる場所には、必ず無邪気さがあるから——。ラーマ

の父ダシャラタ王は大そう無邪気な人だった。クリシュナの養父ナンダもとても無邪気な人だった。よく言うだろう——「アー、何て善い性質だ。まるで牛飼いのナンダみたいだ」と

信者たちは無邪気だ、そして至聖がここに化身していらっしやるのだ、ということを取クルは暗示されたのだろうか？

聖ラーマクリシュナ「(ニランジャンに)ね、お前の顔には何か黒いベールがかかっているようだ。お前は会社の仕事をしているだろう？ だからそうなるのさ。会社じゃ帳簿を付けなけりゃならない。その上いろんな仕事がある。いつも気をつかっていなけりゃならん。

世間の人と同じようにお前も雇われている。でも、ちよつと違うね。お前はお母さんのために職についたんだからな。

お母さんは仰ぎ尊ぶ人なんだ。大実母そのものの姿なんだよ。もしお前が妻子のために雇われて働いているなら、私は言っただろうよ。恥知らず！ 百も恥知らず！ 百べん、チエツ！

(マニ・マリツクに向かつて)ね、この青年はとても無邪気だ。でも近ごろは、一つや半分はウソを言う——これがいけない。このあいだも、また来る」と言っておきながら来なかつた。

(ニランジャンに)だから、ラカールが言っていたよ。——『お前がエンレダ(アーリアダハ——南神村ドブキトシヨルのすぐ南)に来ていながら、ここへ頭を出さないのはどうしたわけだろうか』と

ニランジャン「私はエンレダに、二日居たきりでございます」

聖ラーマクリシュナ「(ニランジャンに)この人は校長さんなんだよ！ お前に会いに行つて下すつ

たんだ。わたしがそういつて頼んだから——。(校長に向かつて) お前はこないだ、バブラームもよこしてくれたね？」

ラーダーとクリシユナ、およびゴーピーの愛

タクルは西の部屋で数人の信者たちと話をしていらっしゃる。その部屋にはテーブルと数脚の椅子が置いてあった。

タクルはテーブルによりかかつて、立つとも坐るともつかぬ格好をしておられる。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——アハー、牛飼乙女たちのあの情熱！ 黒いタマラの木を見ただけで愛に狂ってしまうんだよ！ 聖女（シューリーマティ）（ラーター）は離ればなれになった苦しみの火で、涙は片っぱしから干上がってしまうほどだった。流れるそばから湯気になって蒸発してしまったのさ。だから、

誰も彼女の気持ちを推量することはできない。湖の中に象が沈んでも、誰にも見えやしないだろう」

校長「本当にそうでございますね。ガウランガ(チャイタニヤ)もそんなふうになりました。森を見ればプリンダーヴァンだと思い、海を見ればヤムナー河だと思つたと申します」

聖ラーマクリシユナ「アハー！ あの愛の（ブレイマ）一たらしでも誰か持つていたらなあ！ 何という情熱だろうねえ！ 何という愛だろう！ ただの十六アナ(100%)だけの情熱じゃない。五シキ（二〇アナ）に五アナ足したほどの情熱だ。(訳註——シキ（四アナ）、十六アナ（一タカ）、100%の意味なので、二十五アナは百數十パーセントの意)これが、愛の狂気というものだよ。——というのはつまり、神様を愛せ、というこ

とだ。あの御方に夢中にならなけりやいけな。そこでお前がどの道を行こうと、つまり形ある神を信仰しようと、形の無い神を信じようと、人間に化身した神を信じようと信じまいと——ただ、あの御方を夢中になつて愛しさえすりゃいいんだよ。そうすれば、あの御方がどんなものか、あの御方自身がじかに知らせてくださる。

どうせ気が狂うなら、つまらぬ世間のことで気狂いになどなるな。神様のために気狂いになれ！」

バヴァナート、マヒマーなど信者たちと共にハりに関する話

タクールは再び広間にお戻りになった。この方がお坐りになる席に長枕が一つ置いてあつた。タクールはお坐りになるとき、*クオーム*、*タット*、*サット*、*グ*というマントラを唱えてから長枕に手をお触れになった。世俗的な人々がこの別荘に出入りしていて、皆がこの長枕を使うのだから、きつとタクールはマントラでこれを浄めてからお触りになったのだらう。バヴァナート、校長、その他の人が傍に坐つた。かなり時間がたつたのに、まだ食事の用意が整っていない。タクールは子供のような性質だからこうおっしゃつた——

「どうしたのかなア、まだ出ないね。ナレンドラはどこにいる？」

一人の信者が笑いながらタクールに申し上げる——

「先生！ ラームの旦那が指図しているのです。あの方が万事取り仕切つていらつしやるのですよ」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ、ラームの監督か！ それじゃ無理もないね！」

信者「はい、ラームさんの監督だと、いつもこんな調子でございます」(一同大笑)

聖ラーマクリシュナ「(信者たちを見て) スレンドラは何処にいる? アハー、スレンドラは立派な人物になったね。ハッキリものを言うし、誰に対しても恐れずに口をきく。それにご覧、大そう気がいいよ。誰でも彼のところに頼みに行けば、空手で戻ることはない。(校長に向かつて) お前、バガヴァン・ダースのところへ行ってきたそうだが、どんな様子だったい?」

校長「はい、カルナ(ドゥキネーシヨル)(南神村から北へ約60km)へ行つてまいりました。バガヴァン・ダースもずいぶん年をとりました。夜会つたのですが、敷物の上に横になつておられましてね、誰かが神前のお下がりを持つてきて食べさせてあげていました。大きな声で話しかければ聞こえるようでした。あなた様の名前を聞いて、『お前さんたちはもう心配ないね』とおっしゃいました。

あそこの家では、ブラフマンの名を唱えて礼拝儀式をしております」

バヴァナート「(校長に向かつて) あなたは、しばらく南神村(ドゥキネーシヨル)へいらつしやいませんね。タクールは私にあなたのことをお尋ねになつて、こうおっしゃいましたよ——『校長は、ここに興味がなくなつたんだろう』つて」

こう言いながらバヴァナートは笑つた。タクールは二人の会話を全部きいておられて、校長に向かつてやさしい目つきでおっしゃつた——

「そだよ。お前はしばらくこないが、どういうわけだえ?」

校長はヘドモドしてしまつた。

ちょうどそのとき、マヒマーチャランが入ってきて坐った。マヒマーチャランはコシポールに住んでいる人で、タクールを深く信仰し、いつも南神村ドフケトシヨルに来ている。バラモンの家柄で、親ゆずりの財産がいくらあつた。家族から独立して暮らし、どこにも勤めていない。毎日、聖典を読み、神を冥想していた。少し学者臭いところがある。英語やサンスクリットの書物を沢山読んでいた。

聖ラーマクリシュナは笑いながらマヒマーに向かって――

「これは、これは！　ここに汽船がきて停まつたよ！（一同笑う）こういう場所には小舟しか来れない筈なのに、こりゃ、ほんとの汽船だ！（一同笑う）でもまあ、今はアシヤル月だからな！（一同大笑）」（訳註、アシヤル月――六、七月、雨期で水かさが増しているのです、いつもは通れないような場所でもこの時期には通れる）

マヒマーチャランといろいろな話をなされた。

聖ラーマクリシュナ（マヒマーに向かって）「そうだ、人に食べ物を与えることは、いわばあの御方に対する奉仕の一つだ。そうだろう？　すべての生き物のなかには、あの御方が火となつて宿つていなさるよ。食べさせることは、あの御方に供物を捧げることじゃないか。」

でもそうかと言つて、悪い人間に食べさせてはいけない。姦淫なんかの大罪を犯している者とか、ひどい欲張りだとか、そういう連中が集まって飲み食いしている場所の土は、七八ト（約35m）の深さまで穢けがれている。

フリダイが、郷里のシオルで人に食事の接待をしていた。そのなかに悪いやつらが大勢いた。わた

しはこう言ったよ——『いいかい、フリダイ。お前がこういう連中に食事を出すなら、わたしはお前の家から出ていくぞ』と。(マヒマーに向かって) そう、そう、お前は以前にはよく人に食事を出したそうだが、今は出費でも増えたのかい?」(一同笑う)

ブラフマ協会の会員たちと共に

やつと葉の皿(皿の代りに用いる大きな葉)が南側のベランダに並んだ。タクールはマヒマーチャランに向かって、「あなた、ちょっと行って皆が何をしているか見てきておくれ。あなたに食べ物の盛りつけを頼むわけにもいかないんだが——」マヒマーチャランは、「先ずは持つてこさせて、それから見てまいりましょう」と答えて、何やらブツブツつぶやきながら中庭の方へ行つたが、間もなく戻ってきた。

やがて、タクールが大へんな上機嫌で、信者たちといっしょに並んで食事を召し上がった。食事がすむと、部屋で少しお休みになった。

信者たちは南の池のガートでうがいをしてから、キンマの葉巻を噛みながらタクールのところに集まってきた。

皆が席についた。二時すぎにブラタブが来て席についた。この人はブラフマ協会の会員である。入つてくるとタクールにあいさつをした。タクールも頭を下げて、ナマスカル(こんにちは)とおっしゃつた。ブラタブといろいろな話をなさっている——

プラタブ「先生！ 私は山に行っておりました」（タージリンのこと）

聖ラーマクリシュナ「でも、あなたの体はあんまりよくないようだね。どこが悪いのかね？」

プラタブ「はあ、あの方（ケーシャブ・セン）と同じ病気になるのです」

ケーシャブにもその病気があったこと、その他ケーシャブについてのいろいろな話が始まった。

プラタブの言うところによると、ケーシャブの離欲の精神は、子供の頃から現れていたそうである。

彼が大喜びしたり、楽しそうにしていたりする姿は殆ど見られなかったそうだ。ヒンドゥー大学で学

んでいた時分、サティエンドラと大そう親しくしていた。その縁で、デベンドラナート・タクール氏

（タゴール）と知り合いになった。ケーシャブはヨーガと信仰と、両方を持っていた。時折、彼の信仰

はひどく烈しさを増し、失神することさえあったほどだ。在家の人々の間にダルマを広めることが彼

の生涯の目的だった、等々。（訳註——サティエンドラはデベンドラナート・タゴールの次男）

〔人から尊敬されることと我執——私カルターは行動者カルター——私ダルシヤンは師である——見神ダルシヤンの特色〕

マハーラーシシュトラ州のある婦人についての話が出た。

プラタブ「この州の女の人たちも、何人かイギリスに行きました。その中の一人は大そうな学者で、

イギリス行ってクリスチャンになっています。先生、その人の名前をお聞きになったことがありますか？」

聖ラーマクリシュナ「いや。でもあなたの話をきくと、その人は世間から尊敬されたがつている

ようだね。そういう思い上がりはよくない。私がするんだ」という気持ちは無智から起こる。神よ、あなたがしている——これが智慧というもの。神だけがカルターで、それ以外のものはみんなアカルターだ。(訳註、カルター——するもの。アカルター——させられるもの)

「ワシが、ワシが」と言っているとひどい目に遭うよ。仔牛おうしの境遇をみるとわかるだろう。仔牛はハムマー、ハムマー(おれが、おれが)と鳴く。あれの災難をみる。朝から晩まで、照つても降つてもスキを引つ張らなけりやならない。そうでなけりや屠殺人に切り殺される。肉のかたまりを人間どもに食われる。皮はなめされて靴にされて人が履いて歩く。それでもまだ難儀は終わらない。皮で大太鼓がつくられてバチで始終叩かれる。いよいよ最後に腸でヒモをこしらえて綿すきに使われる。綿をすくときは、トゥフ、トゥフ(あなた、あなた)と音がするだろう。もう、ハムマー、ハムマーとは言わない。トゥフ、トゥフと言うようになって、はじめて解放されて自由になる。カルマの世界にもう来なくてもよくなる。

人間も同じことさ。『神さま、私はカルターじゃない、あなたがカルターだ——私は道具、あなたが使い手』と、こういうようになったとき、人間のこの世の苦しみは終わる。このとき初めて人間は自由になり、もうこのカルマの世界に戻つて来なくてもよくなる」

ある信者「人間の我執アハンカーラは、どうすればなくなるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「神を覚らないうちは、我執はなくならないよ。もし誰か我執のない人がいるとすれば、それはきつと見神した人だよ」

ある信者「先生、見神したということは、どうしてわかるのでしょいか？」

聖ラーマクリシユナ「見神の特徴があるんだよ。シユリーマッド・バーガヴァタに出ているんだがね、見神の特徴は四つある。第一は幼児のようになる。第二は食屍鬼のようである。第三、無生物のようである。第四、狂人のようである、と。」

神を見た人は幼児のようになる。その人は三つの性質を超越している。どのグナにも支配されない。それから、キレイもキタナイも無くなってしまうから——食屍鬼のようでもある。それから、狂人のように、どこかまわず笑い、かつ泣く。紳士のように着飾るかと思うと、間もなく裸になって脇の下に服をかかえて歩きまわったりするから——気狂いのようだ。また時によると、生気をまったく感じさせないで物のようにジッと黙って坐っているから——無生物のようだ」

ある信者「見神の後は、全く我執が無くなるのでございますか？」

聖ラーマクリシユナ「ときどき、あの御方は我執をすっかり消しておしまになる。三昧状態のときのようにね。しかし、大抵の場合は我執を少しだけ残しておおきになる。でも、その我執は毒がない。子供の我執みたいなものでね。五つの子は、『ボクが、ボクが』と言うけれど、誰にも迷惑をかけるまいだろう。」

触り玉（触れるものを黄金に化すという宝玉）に触れると、鉄は黄金になる。鉄の刀は黄金の刀になってしまう。刀の形はしていても、誰にも迷惑をかけない。黄金の刀じゃ、殺すことも斬ることも出来ないからね！」

イギリスでは金を崇拜する——人生の目的は仕事か、神を覚ることか？

聖ラーマクリシュナ「(プラタプに向かつて) あんた、イギリスに行つたんだらう。あちらのことを聞かせておくれ」

プラタプ「イギリスの人たちは、あなた様がおっしゃっている^{カネ}金なるものを崇拜しております。でも、たしかに無執着で立派な人格の人もいることはいますが——。とにかく、すべてに於いてラジャヤス性が顕著でございます。アメリカも同じように見られました」

〔英国とカルマ・ヨーガ——現代ではカルマ・ヨーガか信仰のヨーガ〕

聖ラーマクリシュナ「(プラタプに) 世間の物ごとに執着しているのは、なにもイギリスだけじゃないさ。どこだつてそうだよ。でも知つてるかい？ 仕事(礼拝作法など)をするのは、一番初歩の段階なんだ。サットヴァ性(信仰、識別、離欲、慈善等)が出てこなくては、神をつかむことはできない。ラジャス性で仕事は大きく膨れ上がり、一見華々しくなる。そのあとにくるのはタマス性だ。あまり多くの仕事に巻き込まれると、つい神を忘れるようになる。そして、女と金への執着が強くなる。とは言うものの、仕事をすつかり捨てるわけにはいかないがね。持つて生まれた性質が、お前たちを仕事の方に引つ張つて行くんだ。望んでも望んでなくても、自分の意志にかかわりなくそうなってしまうんだよ。だから、無執着の気持ちで仕事をしろ」と言うんだよ。無執着の仕事——つまり、

仕事の結果を欲しがらないことだ。勤行おつとあしたり、称名したり、修行するのはいいが、人に褒められるためとか、功德をつむため、なんて気持ちでしないことだよ。

こんなふうは無執着の精神で仕事をするのを、カルマ・ヨーガ(奉仕の道)と言うんだよ。とてつもなく難しいことだがね。今は末世カガカだから、人はすぐに自分の働きに執着してしまう。自分では無執着でやっているつもりでも、知らず知らずのうちにどこからともなく執着心が忍びこんでくる。神仏の前で拜んだり、盛大な祭祀まつりをしたり、大勢の貧民や餓えた人に施しをするときも、自分では何一つ求める心なくやったのだと思うかもしれない。だが、どこからともなく、人ひとに認められたい〜という気持ちが忍びこんでくるんだ。全くの無執着というのは、神を覚った人だけができることなんだよ」

ある信者「では、まだ神を覚らない人間はどうしたらよろしいのですか？ この世の勤めをみな捨てるようにしなければならぬのですか？」

聖ラーマクリシュナ「こんな時代には信仰バガティのヨーガだよ。ナーラダが教えた信仰の道だ。神の名を唱えて、讃歌をうたつて、真心込めて祈ることだよ。——『おお、神さま、私に真まことの智慧をお授け下さい。信仰心をお授け下さい。私にお姿を見せて下さい』と。

カルマ・ヨーガはとても難しい。だから、こう祈るんだよ。——『神様、私の仕事を減らして下さい。残った僅かの仕事をするときは、どうぞあなたの恩寵で無執着の気持ちで出来ますように——。アレもしたい、コレもしたいという気になりませんように——』とね。

仕事カルマから逃れる道はない。私は考えている、私は瞑想している、これもカルマだよ。信仰が深まっ

てくるにつれて、世間的な仕事は自然と減ってくる。そして興味もなくなってくる。氷砂糖で作ったジュースを一度飲んだら、安っぽい蜜で作ったジュースが飲めるかい？」

ある信者「イギリス人はいつも私どもに向かつて、仕事をしる、仕事をしる」とばかり申します。では、仕事は人生の目的ではないのですかね？」

聖ラーマクリシユナ「人生の目的は神を体得つかむことだ。仕事というのは、一番はじめの第一章だよ。人生の目的のなかであるものかい。だから、無私の働きデムカマ・カルマも一つの手段だ。目的じゃない。

シャンブーがこう言った。『持ち金をすべて善いことに使えますように——病院や施薬所を建てたり、道路やガートをつくったりできますように祝福して下さい』わたしはこう答えたよ。そういうことをみな、無執着の心でやれるならいいことだが、それは大そう難しいよ。何をするにしても、お前の今生の目的は神をつかむことだということを、片時も忘れるな。病院や施薬所を建てることじゃないんだぞ！もし神がお前の目の前に現れて、一つだけ願いを叶えてやるとおっしゃったら、病院と施薬所を建てて下さいと言うつもりかい？。おお、神様、あなたの蓮華の御足に純粹な信仰をもてますように、そしてあなたにいつも会えますように」とお願いしないつもりかい。病院だの、施薬所だの、あんなものはみな、ほんの一時的なはかない存在だよ。神だけがほんとの実在で、ほかは全部、非実在だ。それに、あの御方をつかんだら、あの御方が行為者カルターで、わたしたちは非行為者アカルターだということがわかる。そうすれば、どうしてあの御方をそっちのけにしてまで、いろんな仕事に追っかけまわされただけで死ぬのに満足できるかね？。あの御方をつかめば、あの御方の思し召しで、病院だろうと施薬

所だろうといくらでも出来るさ。だから、仕事はほんの第一歩だと言うんだよ。仕事が人生の目的じゃないんだよ。修行して、もつと先へ先へと前進しろ。そうすれば、しまいには神だけが実在で、あとはみな非実在だということ、神をつかむのが人生の目的だということがわかる。

一人の木こりが、森に木を伐りに行った。思いがけなく一人の坊さんに出会った。その坊さんは、『さア、さア、先へ行きなさい！』と言いなすった。木こりは家へ帰ってから考えた。坊さんは、『先へ行け』と言いなすったが、何故だろう？

そうこうして何日か経った。ある日、坐っているとフト坊さんの言葉が胸をよぎった。そして、今日はいつもの場所より先の方へ行ってみようかと決心した。森へ行って、先へ進んでみると、白檀の木が数えきれないほどあった。喜び勇んで白檀を車に積んで帰り、市場で売って大もうけした。

しばらく経った。ある日また、お坊さんの先へ進めという言葉を思い出した。森へ行ってもつと奥の方へ進んでいくと、河のほとりに銀鉱をみつけた。夢にも思ってみなかつたことだ。鉱山から銀を掘りだして売った。いくら金^{かね}ができたのか、自分でもわからないくらいになった。

また、しばらく経った。ある日、坐って考えた。あの坊さんは銀の山まで行けと言ったわけじゃない。——そうだ、あの方は私に、もつと先へ行けとおっしゃったのだ。——こんど行くと、金の鉱山をみつけた！『オホーッ！これだからあの坊さんは、先へ進めと言いなすったんだ』と、彼は思った。またしばらくして、その先に行ってみると、ダイヤモンドやその他の宝石がザクザクあった。そして彼は、クペーラ（富の神様）のような大富豪になった。

だから、わたしは言うんだよ。たとえ何をするにしても、先へ先へと努力して進んでいけば、次々により良いものが手に入る、と。少しばかり称名ジヤバをして、何かしら高揚体験をしたからといって、最高の境地に達したなどとユメユメ思うなよ。仕事は人生の目的ではない。もつと前へ進めば、無私の気持ちで仕事ができるようになるだろう。しかし、無私の働きというものは、ホントに難しいものだ。だから信仰をして、熱心にあの御方に祈れ。——神様、あなたの蓮華の御足を信仰させて下さい。この世の仕事を減らして下さい。さいごに残った義務を、無私的心でできるようにして下さい、と。

もつと先へ進むと神をつかむことができる。あの御方に対面することもできる。そしてだんだん、あの御方と話し合うこともできるようになるよ」

ケーシヤブの他界後、教会の祭壇で説教する権利をめぐつて争いが起こっている。今度はそのことが話題になった。

聖ラーマクリシュナ「(プラatapに向かつて)祭壇のことであんたとケンカしているそうだが、ケンカしている連中は、どこにでもいるヤツらさ! (一同笑う)。

(信者たちに向かつて)なあ、プラatapやアムリタはよく鳴るホラ貝さ! うわさに聞いている連中はさっぱり音を出さない! (一同笑う)

プラatap「先生、音のことでしたら、マンゴーの種のようなものでも音は出ますよ」

ブラfマ協会と聖ラーマクリシュナ——プラatapへの教訓

聖ラーマクリシユナ「(プラタブに)——ね、ブラフマ協会の講演を聴いていると、話している人の心境が手にとるようにわかるよ。ハリ・サバー(聖典を朗詠する集まり)の一つにわたしは連れて行ってもらった。教師になつていたのはサマーデヤイーという名の学者だった。神は無味乾燥なものだから、我々の愛と信仰で味わい豊かなものにしなければならぬ。なぞと言う。この話を聞いて、わたしや呆れ返ったよ! とたんに一つの話を書き出した。一人の子供が、『叔父さんの家には、たくさんの馬がいる。牛小屋いっぱいの馬なんだ!』と言つた話。牛小屋がもしほんところにあるのなら、その中に馬を入れることはできない。牛を入れておくのが当り前だ。こんなつじつまの合わない言葉を聞いたら、人は何て思ふかね? 馬なんか一匹もいる筈がないと思ふさ」(一同笑う)

ある信者「馬がいなければかりではありません。牛もいないのです」(みな笑う)

聖ラーマクリシユナ「考えてもみろ、不滅の甘露そのものである御方を、無味乾燥だなんて! これではつきりわかつたのは、その人は神とはどんなものか、ただの一度も経験したことがないということだ」

「私は行為者、私の家——これは無智、人生の目的は飛び込むこと」

聖ラーマクリシユナ「(プラタブに向かつて)なあ、あなたは学問もあるし聡明だし、しんから真面目な人だ。ケーシャブとあなたは、ちょうどガウルとニタイの二人の兄弟のようだったよ。講演することや議論、ケンカ、討論、そんなものはみなやり尽くしてきただろう。まだそういうことに関心

があるのかい？ もう今は、心の全部を神の方に集中しなさいよ。神のふところに飛び込みなさい」プラタブ「はい、おっしゃる通り——。全くのところ、そうすることが今の私の努めでございます」しかし、私がいろいろしておりますのは、ひとえにケーシヤブ氏の名前を後世に残したいからです」聖ラーマクリシュナ「ハハハ。たしかに今は、彼の名を残すためにするのだ」と言っているがね、しばらくするとそんな気持ちはなくなるものさ。こういう話がある——

ある人が丘の上に家を一軒持っていた。掘立小屋だったが、ずいぶん苦勞して建てたものだった。しばらくするとひどい風が来た。掘立小屋はガタガタいはいはじめた。家を守ろうとして彼は一生懸命になった。「風の神様、どうぞこの家を壊さないで下さい！」と祈った。風の神は一向に耳を貸さない。小屋はメリメリと音をたてはじめた。その人はある計画を思いついた——ハヌマーンが風の神の子だということに気がついたんだよ。さっそく夢中になって大声出して祈った——「ババ！ 家を壊さないで下さい。これはハヌマーンの家です、おねがいです！」それでも家はメリメリいつている。誰も彼の言葉をきかないのだ。何度も、何度も、ハヌマーンの家だ、ハヌマーンの家です、と叫んでみたがどうにもならない。今度は、「ババ、これはラクシュマナの家です！ ラクシュマナの家です！」と叫んでみたがこれもダメ——。今度は、「ババ、ラーマの家です。ラーマの家です！ 壊さないで下さい、おねがいです！」それでもダメ——。小屋はメリメリ壊れ出した。もうそうなると命が危ないから、その人は小屋からほうほうの態で逃げ出した。こう言って——「こんなもな、悪魔の家だ！」（プラタブに向かって）ケーシヤブの名前をあんたが守ることはない。何が起こつても、それは神の

御意だ！ あの御方の希望でものは出来、またあの御方の希望で事は去る。あんたが何をしようとい
うんだい？ あんたが今すべきことは、心の全部を捧げること——あの御方の愛の大海に飛び込む
(ジャンプする)ことだ」

こうおっしゃって、タクールは例の無類に甘美な声で歌をおうたいになった——

沈め 沈め 沈め

美しき海に わが心よ

深き底にゆきて探せば

聖愛の宝玉 きみを待つなり

探せ 探せ 探せ

さがせ 汝が胸の神のふるさと(プリンダーヴァン)

ともせ ともせ ともせ

智慧の灯を 常に明るく

すたん すたん すたん

誰がつくのか 米つき棒は

きけ きけ きけとカビールは言う
師の御足を想い 慕えと

(プラタブ向かつて) 歌をきいただろう? レクチャー 講演も議論も十分にし尽くしたんだから、もういいかげんに潜んなさい。それにこの海に潜ったら、もう死の恐れはないんだ。これは不死の海なんだから! そんなことしたら正気を失うなどと思うな。神、神とばかり言っていると気狂いになるなんて思うなよ。わたしはナレンドラにこう言った——」

プラタブ「先生、ナレンドラとはどなたですか?」

聖ラーマクリシュナ「ここへ来る青年だよ。わたしはナレンドラにこう言った——『ほら、神は甘露の海だ。この甘露の海に沈もうとは思わんかい? そうだ、茶碗に甘いシロップが入っていて、お前がハエだとすると、どこに止まってシロップを吸うつもりだ?』と。ナレンドラが答えるには、『僕は茶碗のへりに止まって、首を伸ばして吸います』わたしは訊いた。『どうして? どうしてへりに止まっているのかね?』彼は、『あんまり中に行き過ぎると、落っこちて溺れ死んでしまいますから!』と言う。そこで、わたしは言ってきかせた。『ババ! サッチダーナンダの海にはそんな心配はないんだよ! 不死の海なんだから、その海に入っても死ぬことはない。それどころか、不死になるんだよ! 神を狂うほど想っても、人は正気を失うことはない』

(信者たちに向かつて)——私と私のものが無智だ。ラースマニがカーリー寺院を建てたと人は

言う。誰も、神様が建てなすつたのだ。とは言わない。ブラフマ協会はこれこれの人がやっている。とは言うが、誰も、神の御心みこころであれはできたのだ！とは言わない。私がしている。これが無智というものだ。おお神よ、あなたが行為者カルクター、私は非行為者アカルクター、あなたが使い手、私は道具——これが智識というものだ。神さま、私は何も持っていない。この寺は私のものじゃない。このカーリー寺院は私のものじゃない。この協会は私のものじゃない。すべてはあなたのもの。この妻も息子も家庭も、みな誰一人、私のものじゃない。すべてあなたのもの——これを智識と言うんだよ。

私のもの、私のものといって、何にでも愛着しているのがマーヤーだ。あらゆるものを愛するのがダヤー（慈悲）だ。ブラフマ協会の人だけを愛したり、自分の家庭だけを愛するのはマーヤー（迷い）だ。自分の国の人だけを愛するの迷い。しかし、すべての国の人を愛し、すべての宗教の人々を愛する心は、ダヤー（慈悲）から生まれる。神への信仰から生まれる。

マーヤーによって人間は縛られ、神から背いてゆく。慈悲ダヤーによって神をつかむことができる。シユカデーヴァやナーラダのような方々は慈悲の人だった」

プラタプへの教訓——ブラフマ協会および女と金

プラタプ「先生のところへいらっしやる方々は、だんだんと心境が進んでおられるのでしょうか？」
 聖ラーマクリシュナ「わたしは、世間で暮らしてなぜわるい？と云うんだよ。だが、この世では女中のような気持ちで暮らすことだ」

〔在家の修行〕

「女中は主人の家のことを、私どもの家」と言っている。でもほんとの家は、多分遠い村にあるんだよ。主人の家のことを口では、私どもの家なんて言ってるがね。心の中では、この家は私のじゃない、私の家はあの村にあるんだ」と知っている。それに、主人の子供たちを育てて、私のハリはとてもワンパクで……とか、私のハリは甘いものが好きじゃなくて……などと言っている。私のハリと口では言っても、ハリは私の子じゃない、主人の子だということ、ちゃんとわきままえている。

だから、此処へ来る人たちにわたしはこう言うんだよ——『世間で生活をしていてもちつとも差支えない。だが、心は神のところへ置いておけ。家屋敷も家族も自分のものじゃない。皆、神のものなのだ』と心得ておけ。自分の家は神さまのところにあるのだ』とね。それから、『あの御方の蓮華の御足を信仰できるように、いつも一生懸命に祈れ』と——」

また、イギリス人の話が出た。「^{マハトキエイ}先生、最近イギリスの学者たちは、神が存在するなどという話は信じないそうですね」と言った。

プラタブ「口ではそう言っておりますが、心の底からの無神論者は誰もいないと私は思うのですよ。この宇宙世界の活動の背後に、一つの偉大な力が働いている、ということは大勢の人が認めております」

聖ラーマクリシュナ「それならいいよ。シャクティを認めているんだらう？ それじゃ無神論者と

は言えないだろう?」

プラタブ「他のヨーロッパ諸国の学者たちは、モラル・ガバメント(この世界は、善行には良い報いがあり、悪行には罰がある)ということを認めております」

いろいろ話をしてから、プラタブはお別れのあいさつをしようとした。

「聖ラーマクリシュナ(プラタブに向かつて)ほかに何か、あんたに言うことがあるかしら? でも、これだけ言っておこう。もうこれ以上、ケンカや仲間割れに関わり合いなさんな!

それから一つ——女と金が、神から人を背^{そむ}けさせるんだよ。そっちの方に行っちゃいけないよ。みる、みんな自分の女房をほめる(一同笑う)。良いものもあるうし、悪いものもあるだろう。——でも人が、『君の奥さんはどんな女性かね?』と聞くと、決まってこう答える——『ええ、いい女房ですよ』」

プラタブ「では、私はこれで失礼いたします」

プラタブは出ていった。タクルの貴重な女と金を捨てる話はまだすっかり終わっていないのに——。スレンドラ家の庭園の木立は南風をうけてそよぎ、サヤサヤと音をたてていた。信者たちの胸を打つ言葉の数々は木の葉のささやきと交じり合い、やがて無限の天空へと吸い込まれていった。

しかしプラタブの胸には、この言葉がひびかなかつたのだろうか?

しばらくして、マニラル・マリックがタクルに申し上げた——「先生、トフキネーレンル南神村にお帰りになる時間です。今日はケーシヤブ・センの母上をはじめ、あの家の婦人たちがあなた様にお目にかかりに来ることになっております。あなた様にお会いできなかつたら、さぞがっかりして帰るでしょう」

数ヶ月前にケーシヤブは昇天したのだった。今日は彼の年老いた母上や未亡人や、そのほか家にいる婦人たちがタクールを訪ねてくることになっている。

聖ラーマクリシユナ（「マニ・マリックに」）まア、待っとくれ。わたしや、よく眠れなかったんだから、急ぐことはできないよ。あの人たちがもう行つてゐるのなら、仕様がないだろ。それに、あそこで庭を散歩をしていれば喜ぶだらうよ」

少し休息なさつてから、タクールは出立なさつた——南^{ドッキン}神村へお帰りになるのである。出立のとき、スレンドラの幸福を念じて下さつた。全部の部屋を一つ一つお回りになつて、やわらかいお声で神の名をお唱えになつた。一つでもやり残したことがないようにと、立ち止まつてこうおっしゃる——「あのとき、わたしはルチを食べなかつたね。ルチを少し持つてきておくれ」そして、ほんの一かけ召し上がった。そして——「これには大^わそうな意味があるんだよ！ ルチを食べてこなかつたことを後で思い出したら、またここへ戻つてこなけりやならない」（一同笑う）

マニ・マリック「はつはつはつは、結構なことです。そうしたら、私共もまた参りますから！」
信者たちはみな嬉しそうに笑つた。